

ユニットケア型施設における入居者サービスの実態把握及びあり方に関する研究

【研究要旨】

I 目的

本調査は、現在の介護保険施設におけるユニット型、グループ型（従来型施設においてグループケアを実施）、従来型（従来型施設においてグループケアは実施していない）といった施設類型ごとに個別ケアの実施内容や工夫、課題、満足度の状況を把握し、今後のサービス向上に向けて方策のあり方に関する検討に資する資料を提供することを目的とした。

II 方法

1. アンケート調査

介護老人福祉施設、介護老人保健施設を対象施設とするアンケート調査を行った。調査票は、記入者・調査内容に応じて、「施設票」「入所者票」「管理者票」「職員票」「利用者票」「家族票」の6種類から構成するものとした。

介護老人福祉施設 1,200 施設（ユニット型 300 施設・従来型 900 施設）、介護老人保健施設 800 施設（ユニット型 200 施設・従来型 600 施設）の合計 2,000 施設を対象とするアンケート調査を行った。なお、職員票、利用者票、家族票は各施設 5 名を抽出してもらうこととしたため、各調査票は 10,000 部ずつ送付した。調査対象施設の抽出にあたっては、WAM NET（独立行政法人 福祉医療機構）に登録されている施設名簿と、認知症介護研究・研修東京センターユニットケア推進室の実施する研修の受講施設名簿を突合して「ユニット型」「従来型」の区分をしたうえで、無作為抽出を行った。

2. ヒアリング調査

アンケート調査では把握しきれない各施設での工夫や課題などについて把握するため、介護老人福祉施設、介護老人保健施設、介護療養型医療施設の経営者（法人理事長）、施設長、職員（ユニットリーダーおよびケアワーカーから各々 1～2 名）を対象としてヒアリング調査を行った。経営者には経営面・経理面・人事面を、施設長には施設設計面・マネジメント面・人材育成面・医療面を、職員には運営面・介護面・人材育成面を中心に行った。

ヒアリング対象施設を「施設類型」を軸に、施設定員数が平均的であるという条件のもと、ユニット型施設（一部ユニット型も含む）・従来型施設（グループケアも含む）の 카테고리ごとに抽出した。なお、原則的にアンケート調査に回答があった施設を対象としているが、施設側の都合がつかなかったカテゴリについては、委員の協力のもとアンケート回答施設以外の施設を対象とした。

Ⅲ 結果

1. アンケート調査結果

(1) 回収状況

各種アンケートの回収状況は下表の通りであった。

図表1 回収状況

| 種 類 | 施設票 回収数 | 施設票 回収率 | 入所者票 回収数 | 管理者票 回収数 | 職員票 回収数 | 利用者票 回収数 | 家族票 回収数 |
|----------|------------|------------|-------------|-------------|------------|-------------|------------|
| 介護老人福祉施設 | 388 施設 | 32.3% | 3,312 件 | 373 件 | 1,103 件 | 1,050 件 | 998 件 |
| ユニット型 | 121 施設 | 40.3% | 1,205 件 | 117 件 | 385 件 | 285 件 | 272 件 |
| 従来型 | 267 施設 | 29.7% | 2,107 件 | 256 件 | 718 件 | 765 件 | 726 件 |
| 介護老人保健施設 | 216 施設 | 27.0% | 2,152 件 | 210 件 | 621 件 | 522 件 | 501 件 |
| ユニット型 | 56 施設 | 28.0% | 626 件 | 54 件 | 161 件 | 77 件 | 67 件 |
| 従来型 | 160 施設 | 26.7% | 1,526 件 | 156 件 | 460 件 | 445 件 | 434 件 |
| 合 計 | 604 施設 | 30.2% | 5,464 件 | 583 件 | 1,724 件 | 1,572 件 | 1,499 件 |

(2) 施設票

① 入所者の状態像

入所者の状態像についてユニット型、グループ型、従来型で比較すると、平均要介護、障害高齢者の日常生活自立度、認知症高齢者の日常生活自立度のいずれの指標についてもユニット型入所者がやや軽い状態像にあることがわかった。なお、入所者の所得段階をみると、介護老人福祉施設では、ユニット型の入所者における第4段階の割合が、他の類型に比べてやや多かった。

② 職員配置

ユニット型、グループ型、従来型の各類型別に職員配置をみると、ユニット型が他の類型に比べて手厚い配置となっており、深夜帯においてもユニット型が手厚くなっていた。

③ 施設設備

施設設備については、ほぼ全ての項目についてユニット型での設備割合がグループ型を上回っていた。例えば、ユニット型とグループ型におけるキッチンの什器・備品の設備割合をみると、ほぼ全ての什器・備品についてユニット型の割合が多くなっていた。また、浴室の状況をみると、ユニット型では個別浴槽の設備割合がグループ型を大きく上回っており、個別浴槽による入浴が多く行われていた。

④ 個別ケアの実施状況

ユニット型では、キッチン等の家事用品、個別浴槽などのハード面を活かして、他の施設類型と比較しても、個別ケアの実施が進んでいることが明らかとなった。ただし、ユニット型においても一部ではあるが個別ケアの実施が十分になされていないと考えられる施設も見られた。

ユニット型の個別ケアの実施については、「起床」「入浴（マンツーマン入浴の実施状況、曜日・回数の自由度）」「食事」「排泄」について、「介護職員の固定配置（昼間）」「職員配置」との関連を検討した。

- ①「介護職員の固定配置（昼間）」に関しては、小規模単位での固定配置を行っている施設の方が「入浴回数等の自由度（入所者の希望で曜日・回数が異なる）」が高くなる傾向があったが、他の介助については同様の傾向は見られなかった。
- ②「職員配置」に関しては、配置が厚くなるほど入浴回数等の自由度が高く、排泄個別支援（入所者の排泄のリズムに合わせる）を実施している施設の割合が高くなる傾向が見られた。

従来型をユニット型へと変更していくには、ハード面での大幅な改修を伴うこともあり、必ずしも容易ではない。その中で、従来型においてグループケアを実施している施設（グループ型）では、個別ケアの実施に一定の進捗が見られた。そこで、グループ型の個別ケアの実施についても「起床」「入浴（マンツーマン入浴の実施状況、曜日・回数の自由度）」「食事」「排泄」と「介護職員の固定配置（昼間）」、「職員配置」「1グループ当たりの規模」との関連を検討した。

- ①「介護職員の固定配置（昼間）」に関しては、小規模単位での固定配置を行っている施設の方が「入浴」「起床」において個別ケアの実施が行われていた。
- ②「職員配置」に関しては、「入浴」「起床」「排泄」では、より人員配置が高いほど個別ケアの実施されていた。
- ③「1グループ当たりの規模」に関しては、グループ規模の小さい施設ほど、入浴回数等の自由度が高かった。

このように、グループ型においても、ハード面での制約がありながらも運営やソフト面での工夫や取り組みによって、個別ケアの実施の可能性が示された。

（3） 管理者票

① 人事労務管理

ユニット型では、他の施設類型に比べて人事労務管理の課題として、「給与水準の向上」「職員配置」をあげる管理者が比較的多かった。

また、ユニット型では、「職階、資格に着目した手当」「成果評価」「人事考課制度」など、職員のキャリア形成を意識した取組みが比較的なされていた。

② ユニット型の効果と課題

管理者の考えるユニット型の効果として挙げられた項目は、「個々の状態の把握しやすさ」「施設を訪問しやすさ」「プライバシーの確保」などの割合が高かった。なお、一部ユニット型では、「個々に合わせたケアの提供」、「職員を交えた団欒」「動線の短さ」などの割合が完全ユニット型より高い。

一方、ユニット型の課題としては「利用者負担額の大きさ」「入居費用の負担」「高い技術の必要性」「精神面での負担」「職員の質の向上」などの割合が高かった。また、一部ユニット型では「利用者負担額の大きさ」「入居費用の負担」が完全ユニット型より高く、「高い技術の必要性」「精神面での負担」が低かった。

(4) 職員票

① ユニット型の効果と課題

職員の考えるユニット型の効果としては、「利用者の個々の状態が把握しやすい」「個室なので施設を訪問しやすい」「きめ細かいケアが提供できる」などであり、管理者と同じような傾向であった。一方、ユニット型の課題としては「欠員補充が困難」「ストレスが高まりやすい」「人間関係が上手くいかないと苦痛」などが挙げられた。

② 仕事について

労働条件や就業環境に関して満足度の高い項目は、「高齢者福祉に携わること」「利用者や家族との関係」などであった。一方、低い項目としては「賃金」「休暇の取得」「キャリアアップのしくみ」などであった。これらについて、ユニット型、従来型に大きな差異は見られない。負担感として「やっと終わった」「ゆとりがない」「疲れ果てた」と感じている職員が多かったが、ユニット型、従来型で負担感に顕著な差は見られなかった。

また、職場や仕事に関する意識のうち肯定的な側面として「成長できる」「やりがいを感じる」と考える者が多く、否定的な側面として「賃金が低い」をあげる者が多かった。これらの項目でもユニット型、従来型で大きな差は見られなかった。

ユニット型においての今後求められる点としては「高い技術の必要性」「職員の質の向上」が上位にあげられており、これは管理者票でも同様の傾向であった。より個別ケア実施に向けて、職員の質の向上が求められており、これらをいかに支えるが大切となると考えられる。

(5) 本人・家族票

これら本人・家族へのアンケート調査は施設側から無作為に配布して頂いたものであるが、協力頂いた方には一定の偏りがある可能性があることを踏まえて結果を見る必要がある。

① 現在の施設を知ったきっかけ・選んだ理由

現在の施設を知ったきっかけは、いずれの類型でも本人では「家族から聞いた」が最も多く、家族では「ケアマネジャーやヘルパーから聞いた」が最も多かった。その他の項目では、ユニット型に「知人から聞いた」が多く、従来型では「その施設のデイやショートを利用」「市町村や町村役場の職員から聞いた」が多かった。

現在の施設を選んだ理由については、ユニット型では「個室に入りたかった」「施設がきれいだった」が多いのに対して、グループ型・従来型では「ケアマネジャーに勧められた」「デイやショートで利用したことのある施設」との回答が多かった。

② 現在の施設への満足度

現在の施設への満足度についてみると、いずれの類型においても「大変満足している」「満足している」の合計は9割以上を占めていた。ただし、「大変満足している」のみをみると、ユニット型が他の類型を上回っていた。満足である理由については、ユニット型では「個室なので落ち着いて生活できる」「ていねいに世話をしてくれる」「居室やリビングなどがきれい」などが多かった。また、従来型では「ていねいに世話をしてくれる」「親しい職員がいて、よく話を聞いてくれる」などが多くみられた。

なお、本人・家族がユニット型やグループ型と従来型を両方経験し、それらを比較して過ごしやすさを問うている質問は回答数が少ないため、データの捉え方に留意が必要であるが、「病院」「従来型施設」からユニット型施設、グループ型へ移動してきた本人・家族の評価は

高い傾向にあった。

③ 職員に関する意識

利用者本人の思いや願いについての職員による理解度は、いずれの施設類型においても「よく理解している」「まあ理解している」の合計が8割以上を占めていた。このうち、「よく理解している」だけをみると、ユニット型が他の類型を上回っていた。

(6) 入所者票

入所者の要介護度、障害高齢者の日常生活自立度、認知症高齢者の日常生活自立度について、現在の認定状況と、前回認定時の状況を比較したが、ユニット型、グループ型、従来型で、改善・悪化の変化の割合に顕著な差は見られなかった。

2. ヒアリング調査結果

(1) 小規模単位ケア導入動機と広がり

完全ユニット型では、小規模単位ケアの意義を考えユニット型を導入していた。また、一部でもグループ型やユニット型を導入した施設では個別ケア実施への動機が高まり、従来の形態の見直しを行う傾向が見られた。

(2) 人員の加配と経営上の課題

介護単位（ユニット単位、フロア単位等）に幅はあるが、人員は介護単位が定められている施設では固定配置がとられており、ほとんどの施設で人員の加配（指定基準を上回る介護・看護職員の配置）がなされていた。経営の困難さも経営者から聞かれ、人員の加配と健全な経営との整合性をいかにとっていくかが課題として示された。

(3) 人材確保の困難さと定着への工夫

人材確保については困難な施設も見られたが、離職率が高い施設は少なく、一度働き始めると辞めない傾向が見られた。人員確保、定着に対しては保育所の設置等、各施設で工夫が行われていた。また、グループ型やユニット型固有の課題ではなく施設の経営方針や外的環境によるものであるが、常勤比率の向上は個別ケアを実施していく上でさらに重要な要素と考えられた。

(4) 人材育成（OJT）の難しさと工夫

人材育成については、研修等の必要性が示され、多くの施設で工夫がなされていた。ただし、ユニット型やグループ型に関しては、職員が1人で動くことが多く OJT がやりにくい面があり、新人教育等の難しさがあげられた。工夫している施設では、新人に対してスキルシートを用意して一人前になり夜勤ができるようになるためには何をクリアすべきか課題を整理したり、介護技術の向上が必要な職員に対して教育担当がついて個別に技術的なことを指導し、一緒にシフトに入って助言を与える等といった取り組みがされていた。

(5) 職員のやりがいと負担

多くの職員からユニット型、グループ型を導入したことでプラスの変化があることが示されていた。一方で、やりがいと職員の負担は表裏一体といった側面も見られた。それは、小規模だか

からこそ深められる利用者や家族との関係性の側面と、深いからこそ個人が持つ責任の重さをストレスとして感じるという側面である。また、一人で対応することが多くなることで、自分自身の対応や判断の正しさへの不安等もあげられていた。なお、ユニット型、グループ型であるから疲弊する職員が多いということはなく、職員の向き不向きが関係しているという意見が多く施設で聞かれた。

(6) 裁量拡大の推進

ユニット型・グループ型両施設で裁量拡大が進んでおり、施設長決裁を減らすことで現場が判断しやすい環境づくりがされていた。また、ユニット費、グループ費を導入している施設も多く、自由に使える費用として位置づけられていた。

(7) ハード面での制約

ハードの側面がケアを規定している状況が、特にグループ型では示されていた。改修を重ねたが、総じてスペースが狭く、限界を感じていた施設も見られた。ユニット型は全室個室が要件であり、介護老人福祉施設には補助金制度があるが医療法人が経営する介護老人保健施設にはないため、大きな建物を建てるのが困難である状況が示された。

(8) 個室の捉え方

個室に関しては、多くの施設で重要性が認識されていたが、様々な意見が聞かれた。個室であることで、利用者も安心して職員に話をするようになり発話も増えた、利用者と落ち着いてコミュニケーションをしながらリハビリテーションができる、認知症の人が落ち着いて過ごしやすい、等の意見が聞かれた。一方、1人だと淋しいという利用者、夫婦で入所する利用者、低所得者層のニーズを踏まえて多床室があってもいいのではないかと、等の意見も聞かれた。

(9) 医療依存の高い利用者・重度者への対応

多くの施設で、喀痰吸引や胃ろう等の医療依存度が高い利用者に対応していた。ただし、対応しきれない状況も生まれていた。また、重度の利用者や認知症が重度化した利用者はコミュニケーションが難しいからこそ、個別ケア、ユニット型が望まれるとの意見が示された。